

午後7時を過ぎると、三々五々、人が集まってくる。来た人から順にテーブルを囲み、なごやかな夕食となる。席は特に決まっていな



02

“Take part”という暮らし方
多世代が生活を共有する、かんかん森

Collective House コレクティブハウス

70年代の北欧で、働く女性たちが、よりよい暮らしを求めて
実現したのがコレクティブハウジングという暮らし方だ。

集合住宅に共用空間を設け、住人が家事の一部をシェアするもの。

この暮らし方を、日本で初めて多世代で実現しているのが東日暮里にある“かんかん森”である。

写真＝小松士郎

午

後4時半。食事当番の3人がコモンキッチンに集まってきた。今日のコモンミール、23人分の夕食づくりの始まりだ。野菜を刻みだしをとり、お米を研ぐ。「じゃがいもが足りないね」「大根の切り方はこんなもの?」。忙しく手を動かしながら、どんどん料理が出来上がっていく。6時半を過ぎると、仕事から戻った人が顔をだし、声をかけていく。7時をまわると人が集まりはじめ、来た人から順番に食べ始めていく。「これおいしいよ」「ちょっと味がうすい?」「キムチ持ってきたかな」。そこでおしゃべりが始まり、笑い声が響く。これが、かんかん森のコモンミールの風景だ。

現在、かんかん森には、3歳から80歳まで、35人が住んでいる。世代も家族構成もさまざま。ルームシェアリングをしている人たちもいる。この暮らしの特徴は、プライベートな賃貸の住居部分(キッチン、バス、トイレ付き)以外に、コモンキッチン・ダイニング・リビング、テラス、家事室、洗濯室などの共用スペースがあることだ。共

用スペースは、居住者によって賃貸されていて、24時間開放され、ダイニングは週3回のコモンミールや月1回の定例会に使用されるほか、友人を呼んでもいいし、住んでいる人同士でのんびりくつろいでもいい。36畳という普通では考えられないほど広い空間が、自分のスペースとして自由に使えるのだ。

かんかん森に入居が始まったのは、昨年の6月。が、その2年半前から、コレクティブハウスへの理解を深めるワークショップが開かれ、その中から居住希望者の会ができ、参加型の設計と運営が行われていった。住居に洗濯機置き場はあったほうがいいのか、リビングにはどんなテーブルと椅子を入れるのか、リビングにテレビを置くか……。35回を超えるワークショップを通して、多くのことが決まっていた。「こういう暮らし方は日本にはモデルがありませんでしたから、誰もイメージがない住んでみてわかったことはたくさんありました」と語るのはプロジェクトに最初からかわり入居のコーディネイトを行っているNPOコレクティブハウジ

ング社の宮前眞理子さんだ。入居後も、さまざまなことが話し合われ、暮らし方のコツが少しずつわかってきたという。たとえば、コモンミールの準備当番でない人は、コモンリビングでくつろいでいてもなんら問題は無いのだが、最初は、気働きをしないといけないのでは、という思いからつい毎回手伝ってしまい、かえって疲れてしまったと木村ひろ子さんは言う。「当番の人は、それが自分の仕事だからやっているだけで、手伝ってほしいとも思っていないのです。その辺の加減がわかって、だいぶ楽になりました。掃除も、当番の人たちがいつせいにやるのではなく、担当の場所を決め、各自が都合のいい時間に行っている。ただ、窓掃除は一緒にやったほうが楽しいし作業もはかどるので、都合がつく人は一緒にやっている。ルールは、臨機応変に変わっていく。試してみても都合が出たら、もっといい方法を考える。その柔軟さも、この暮らしの秘訣だろう。」

かんかん森には15もの活動グループがある。生活に必要な要素を住人同士で分担して考えることで、ひとりあたりの負担を減らしながらも、生活の質は向上させる仕組みだ。「ある人がやるべき部分」を担う、と言ったのですが、あ、びったりだと思いました。各自が自立した生活を営んだうえで、暮らしの部分を担い合う。ひとりではできなかったことが、大勢ならできな。それが豊かな生活を生み出していくのではないでしょう

コモンリビングには、ゆったりとしたソファやエクストレムの椅子、子供のおもちゃが。



上/掲示板には、各種のお知らせ、当番表などが。貴重なコミュニケーションツールである。右/廊下にある活動グループのメンバー表。